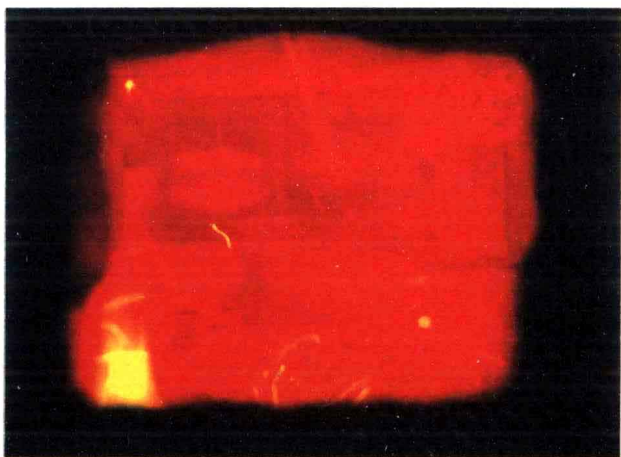
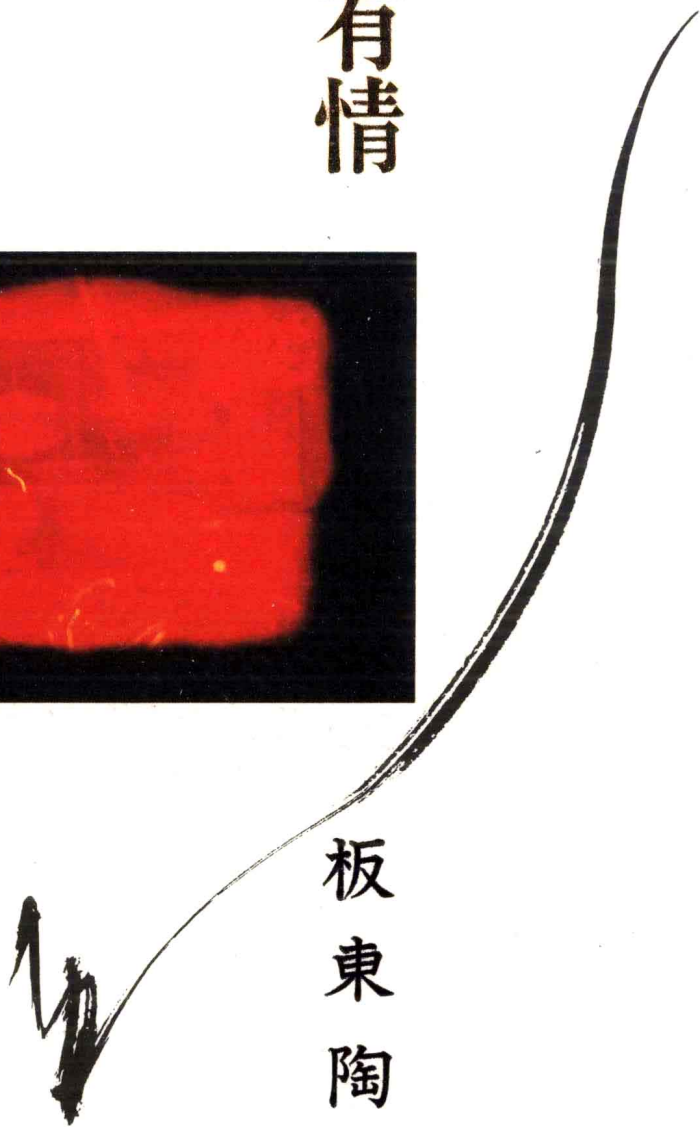


陶と短歌

# 窯変有情



板東陶光



火に住まふ神もあれかし  
幾箇の陶と吾との洗礼は  
今

陶と短歌

# 煮変有情

板東陶光

## 窯変有情

一九九六年八月一日発行

著 者 板東陶光

装幀者 藤田民子

発行者 小林 東

発行所 緑 鯨 社

〒〇八五 北海道釧路市栄町八ージス・イズ内  
電話・FAX 〇一五四（二二）二五一九

印刷所 株式会社 藤プリント

〒〇八五 北海道釧路市栄町一〇一三  
電話 〇一五四（二二）九三一一

定価五〇〇〇円

## 目 次



アトリエの春

102 月暈

108 人恋

111 アトリエの春

127 沙羅光

136 交脚菩薩

142 釉窓

幻壺

150 花散華

162 墜ちてゆく時間

170 花の主張

177 幻壺

181 青壺

窯変有情

192 窯変有情

198 陶歴

200 あとがき



窯変有情

## 一 投入魂・陶光芸術の結晶

黒田草臣

「北海道に『大雪窯』あり」と存じあげたのは私がこの仕事に入って間もない昭和40年頃であった。しかし、既に陶光先生が旭川に大雪窯を開設してから20年が経過していた。

土器は日本の縄文土器が一万二千年前。陶器は人類文明の発祥の地で生れており、一番古いのは今から五千年前、エジプトの銅呈色のアルカリ釉の陶器だった。磁器が焼かれたのはお馴染み中国北宋代の景德鎮窯であり、もう一千年近く前のことである。陶芸不毛の地といわれた北海道に本格的な陶芸を開拓したのは他ならぬ板東陶光先生であり、すでに50年が経過している。

現在、一〇〇人を越えるという北海道の陶芸家の草分けとして、その頂点に立ち、半世紀におよぶ独創性にあふれた陶芸の足跡とともに我々の想像を遥かに越える素晴らしい作品の数々を人々に捧げてきた。

開窯当時は陶芸の産地と違って多くの難関が先生を苦しめた。なぜなら、有名産地のような可塑性のある粘土は北海道にはなく、今日のように全国の粘土がたやすく手に入る御時世ではなかったのである。しかも土練機がある筈もなく、凍てつく寒さの中、素足で土を揉み、手で土を練る作業を繰り返し返すという現在では考えられない並々ならぬ御苦労があったのである。さらに窯道具などを調達するのも困難を極め、文字通り『炎・土・造り』の試行錯誤を繰り返す苦難の道を切り開いたのだ。

昭和23年11月には昭和天皇ご夫妻と皇太子に抹茶茶碗を郷土の特産品として制作している。これが御縁で、29年には昭和天皇が旭川に来られ

た折、陶光先生作大雪窯の茶碗や煎茶器、花瓶などの作品を御覧になられた。

昭和55年、大雪窯を次男の豊光氏に譲り、御自分は夕張郡長沼町アトリエ村に、ご自身の手で雪炎窯を築窯し、さらに穴窯を57年に築窯している。

穴窯は荒い炎が直接、作品にあたる直炎式と呼ばれる半地下式の原始的な窯。五世紀に百済や新羅から渡ってきた陶工たちが轆轤とともに北海道を除く各地に伝え、そこで須恵器が焼かれた。当時は画期的な窯であつたが、後に熱効率の良い登窯が日本全国を席卷したのである。ところが、原始的であるが自然釉が容赦なく作品にふりかかる穴窯の魅力にとりつかれた陶光先生、とうとうロスの多い穴窯を北海道の苛酷な土地に築窯してしまった。割り木を一投入魂し、何日も焚き続ける焚き口はまさに『火の窓』。この穴窯で長時間焼かれた穏やかな膨らみをもつフォルムの壺などに重厚な自然釉の流れが美しく映え、焼物の醍醐味を余すところなく感じさせている。

さらに、北海道の美しい雪の結晶をおもわせる結晶釉の作品。金属の複雑な化合でもたらせる誠に現代的な釉薬で、陶光先生のテクニカルな若さの結晶ともいえるもの。『雪の華』と名づけられた結晶釉の微妙な輝きは、見る人を深遠な世界に誘い込んでくれる。

李朝や中国宋代の工芸品に目を向け、古美術の神髄を把握する鑑識眼に養われた創作力。加えて作陶に対する若々しい執念深さと豊かな表現力が、内面性を重視した風格ある作品を生み出す要因となっている。

緑豊かな長沼の別天地で仙人のように悠々自適の板東陶光先生はこれからも、益々、ロマンチストな『陶光芸術』の結晶を造り上げていくだろう。

## 歌と人と陶と

村上白郎

板東陶光先生とお近づきになってから、もう三〇年になる。先生の第一歌集『火の窓』の出版が一九七一年で、そのかなり以前からだから、そうなる。旭川時代の大雪窯も何度か訪ねたが、その後先生は長沼に移り、今の雪炎窯を築かれた。私も一九八六年定年退職後、岩見沢に住むようになり、近くもあり、ひんぱんに訪ねるようになった。何時か留守の間に上りこみ、勝手に庭を巡ったこともあった。素焼の茶碗に、歌などを落書きさせてもらったこともあり、筆立などを作らせていただいたこともある。成吉思汗鍋を囲みあったことも何度かある。人はつきあいが長くなると、いわゆる「なれあい」の状態になりがちなのだが、板東陶光先生は、三〇年前と少しも変わらない。

わが生きて限るいのちの陶展にこの饒舌も神は宥さむ

これは最近の歌だがここで言う「饒舌」とはいわゆる「おしゃべり」とは違う。もつとも心のひらいた状態、限りなくたましいの自由な状態、是も非もなく己が己である状態の謂なのである。私はこの歌を読んだとき一種の衝撃をうけた。ああそうなのか、と思った。深く納得するものがあつた。

『火の窓』の「あとがき」に、「また短歌も、心の中で燃焼を続け推敲を重ねている間に、その感動は、私を夢多い少年の純な刻に還し、いのちの若やぎはそのまま肩のこらない陶の作品に移ってゆき、陶と短歌は、このようにして決して二ツのものではない。」という部分がある。

そのあとで、「私は陶工であつて、決して歌人ではない。」とも言ふ。しかし、すぐ、「その自覚はおそらく生きている限り変らないが、心の燃えは歌人と全く同じであり時にはそれ以上であると思つてゐる。」と静かな自負をも見せてゐる。

最近の作をもう少しあげる。

老ゆるも可　血の騒ぐまま真夜起きて無心に廻し続ける轆轤

平和とは愛とは何ぞ天地に生きて成りたる壺にサインす

かつて死は観念のなか美化せしも陶の炎群に悲喜はゆらげり

夏椿咲けば身近に一輪を活けて轆轤を静かに廻す

いのちありて思ひ憶はれ陶を焼くわれの一途に冬蠅寄る

秋深み秋の窯焚く慣はしを促すごとし朝の落葉は

火に住まふ神もあれかし幾百の陶と吾との洗礼は今

露草の露に及べる月暈の薄き光に窯の火止むる

窯出づるその良し悪しを問ふなかれひとつの壺に心足らひき

何の説明も要るまい。何のつけ加えるべきものも要るまい。だまつて、静かに読めばいい。読者もその境地に共に遊べばいい。

私は最近「陶も個展の度に新しい彩、新しい象が加わり、たじたじの思いで見るのだが、歌もまた同じ展開を見せている。同一作者だから当然とはこの場合言えぬだろう。そこにある誠実さ、緊張感の持続を、私は眩しい思いで見る。」と雑誌に書いたばかりである。いまでもその思いに変わりはない。

雪炎窯の前庭に水琴窟がある。聴く度に、季節毎に、その音色が違ふ。いつも、そのひびきは新しい。陶と歌の、明日の新しい顔を、私は、なお信じて待つちたいと思ふ。



黃河抄



## 黄河抄

一九九三年晩春、黄河流域の古窯趾をめぐる。

蘭州の空港は雪・黄砂さへ交へて四月旅は始まる

旅人のわれも並びて鐘をつく蘭州大寺のひと日の信徒

ウイグルの古窯に生れし大壺の彫りあざらけき黄河の雷魚

蘭州の古き歴史に触れし夕黄河の水に足をひたせり

土耳其青の空を映せし五泉湖にわれも屈みて喉<sup>のみど</sup>うるほす

語るなく時<sup>かさ</sup>累ねつつ流紋を砂は残せり黄河は生くる

戦乱に威を誇りしと黄<sup>きい</sup>の幢<sup>ばん</sup>いまも飾れり西安博物館

古都洛陽離れしここの道祖神なかば没してわれを見てをり

手にとれば壺の底ひに工人の指<sup>おゆび</sup>のあとかかすかに残る

赤土の丘を崩して陶を焼く町の最<sup>もなか</sup>中に古窯はありて